

「古代語のしるべ」第七回

イスロコフ

—— イススク・ウススク・ウソソクと合わせて ——

蜂矢真郷

『時代別国語大辞典上代編』（以下、『上代編』と示す）に、「いすろこふ（動）」の項がある。全文は、次のようである。

未詳。心勇む・進み行なう意か。「神等の伊須呂許比あれび坐すを言直し和し坐して」（祝詞大殿祭）

『祝詞』大殿祭の例の原文（割注の形は一行にして示す、以下同様）は、

神等乃伊須呂許比阿礼比坐乎言直之和之 古語云 夜波之坐互

のようであるが、九条本のこの箇所には訓はない。沖森卓也氏編『延喜式祝詞総索引』[1995]「汲古書院」は、「神等のいすろこひあれび坐すを言直し和し坐して」と訓読している。この語は、孤例であるが、アレブと対になって用いられることが手がかりにはなる。しかし、アレブも他に見えない語で、『上代編』には、

未詳。アラブに似た意味か。（用例略）【考】唯一例、しかも上のイスロコヒも一字一音の仮名書きになっていて、古い伝承をそのまま記載したかと思われる部分で、不明の点が多い。まず「比」は清濁不明だが、アラブなどと考え合わせて仮に濁音とする。次に活用は、「比」からすれば四段か上一段と推定するのが常道だが、この場合はむしろ上二段であろう。

とある。確かにバ行上二段動詞の例は、アラブ「荒」

荒夫琉神等夫琉二字以音

〔荒夫琉神等夫琉二字、音を以るよ〕

〔古事記〕中巻・神武

などのように、他にかなりあるので、上代特殊仮名遣の差違はあるが、この見方は順当とも言える。

イスロコフは、「未詳。荒れすさぶの意か。」（『岩波古語辞典』（初版・補訂版）「岩波書店」）とも、「語義未詳。心勇み、心勇み争う、の意か。」（『日本国語大辞典』「小学館」〔初版・第二版〕）とも言われ、粕谷興紀氏『延喜式祝詞（付）中臣寿詞』[2013.10 和泉書院]

は、「下の「あれび」と並立するような意味の語であることは間違いないので、騒ぎ立てるとか、さざめくとかいう意味の語ではなからうか。「あれび」は「あらぶ」（上二段）の転で、あばれるの意。」とされる。

さて、ここに、イスロコフを、これらとは別に、イススクと合わせとらえることを考えてみたい。

イススクは、

其容姿麗美故 美和之大物主神 見感而 其美人為(一)大便(二)之時 化(三)丹塗矢(四)自(下)

其為(一)大便(二)之溝(三)流下 突(四)其美人之富登(五) 此二字以音下效此 尔其美人驚而立走

伊湏須岐伎此五字以音(略)娶(一)其美人(二)生子名謂(三)富登多多良伊湏須岐比賣命(四)

「其の容姿麗美しきが故に、美和の大物主神、見感でて、其の美人大便らむと為

し時に、丹塗矢に化りて、其の大便らむと為し溝より流れ下りて、其の美人の富

登此の二字、音を以るよ。下、此に効へ。を突きき。尔くして、其の美人驚きて、立ち走

り伊湏須岐伎此の五字、音を以るよ。(略)其の美人を娶りて、生みし子の名は富登

多多良伊湏須岐比売命と謂ふ。」(『古事記』中巻・神武)

於(一)是 有(二)一女人(三)爲(四)資(五)上己之眞子(六)而墮(七)於江(八) 故号(九)宇湏伎(一〇)新辭伊

湏須久

「是に、一の女人有り。己が眞子を資上げむと為て江に墮ちき。故、宇須伎新の辭は伊湏須久なりと号く。」(『播磨国風土記』揖保郡)

の例があり(後者は、三条西家本に「伊波湏久」とあるので、新編日本古典文学全集5『風土記』『小学館』のようにイハスクとされることもある)、「未詳。うろたえる・あわてる、の意か。ウスクとも。」(『上代編』)とされる。

今一つ、イススキ(片仮名の右傍線は上代特殊仮名遣の甲類であることを示す)は、

引結幣魯葛目乃緩比取葺計留草乃噪伎 古語云 蘇蘇伎 无久御床都比乃佐夜伎夜女乃伊湏須伎伊

豆都志支事無久

「引き結幣魯葛目乃緩比、取り葺計留草乃噪伎 古語に蘇蘇伎と云ふ 无久、御床都比乃佐夜伎 夜め乃伊湏須伎伊豆都志支事無久」(『祝詞』大殿祭)

の例があり、「未詳。次項イススクの名詞形。周章狼狼の意か。」(『上代編』)とされる。

このイススクに対して、平安時代に下ると、ウスクの例が、

御門守、寒げなるけはひ、うすゝき出で来て、とみにも、えあけやらず  
(『源氏物語』朝顔)

のようにあり、「うすすく」は、上代の「いすすく」と同じく、あわてふためく意。」(新編日本古典文学全集21『源氏物語』2「小学館」)とされて、イススクーウスクは母音交

替ととらえられる。

さらに、ウソソクの例が、

猯ウソク

〔類聚名義抄〕

のようにあり、ウススクーウソクは母音交替ととらえられる。この例は「猯」字の訓であり、「兎」字が「兎」字の異体字として用いられることを参照すると、「猯」字は「猯」字の異体字と見られ、「猯」字は慌てる・うろたえる意の「狼猯」の「猯」であって、ウソクのみならずイススク・ウススクも慌てる・うろたえる意と見てよい。

ところで、イスロコフは、動詞イスロクを想定し、それが反復・継続の意を持つ接尾辞フを伴ったものととらえられる。仮に、イスロコブのように濁音ブであるとすると、五音節以上のバ行動詞の上代ないし平安初期の確例が見られるものは、オモヒワブ「…思ひわぶらむ〈於毛比和夫良牟〉」〔『万葉集』巻一五・三七二七、へ〕内は原文、以下同様）のような複合動詞のものか、アカラシブ「父母懇〔懇阿可良之比天〕」「父母懇〔ビテ〕」〔『日本霊異記』上巻九縁・興福寺本、「内は訓釈）のようなシク活用形容詞語幹＋接尾辞ブの構成のものぐらいであるので、濁音ブのイスロコブであるとは考えにくい。

第一音節をA、第二音節をBで表すと、ABラないしABロが接尾辞クを伴う動詞は、マクラク「いかにあらむ日の時ときにかも音知らむ人の膝ひざの上我が枕まくらかむ〈和我摩久良可武〉」〔『萬葉集』巻五・八一〇〕・トドロク「闇（略）佐和支美太留 又止と呂久」〔『新撰字鏡』〕などがあるので、想定されるイスロクは、イスラないしイスロが接尾辞クを伴ったものかと考えられる。その際に、ラーロは母音交替ととらえられる（ラーロ乙類の母音交替の例は多い）。

村上昭子氏「接尾辞ラシイの成立」〔『国語学』124 [1981.3]〕は、ハカバカシイーハカラシイ、バケバケシイーバケラシイなど、また、ウルウルトーウルラト、ヌクヌクトーヌクラトなどの対応を基にして、重複することと接尾辞ラを伴うこととが対応すると述べられる。村上氏の挙げられる例は中世に下っているが、それとは別に、重複することと接尾辞ラを伴うこととの対応については、森重敏氏『日本文法通論』[1959.1 風間書房]を参照して、上代・平安初期頃の例を基に、別書(一)『国語重複語の語構成論的研究』[1998.4 塙書房]〔第六篇〕に述べたことがある。とすると、イスの重複とイスラとが対応することになり、そして、上代ではイスの重複イスイスは母音の連接を避けイが脱落してイススになる（別書(一)で「縮重複」と呼んだ）ので、イススクとイスラク（ないし、母音交替したイスロク）とが対応することになると考えられる。

かくして、慌てる・うろたえる意のイススクとイスラク・イスロクとがほぼ同じ意を表し、接尾辞フを伴ったイスロコフはその反復・継続を表すととらえることができる。

さて、イススクの重複素イスは、イソク「急」のイソの母音交替かと考えられる（スーソ甲類のようなウ列ーオ列甲類の母音交替の例は多い）。先に見た播磨国風土記のイススクの例に「宇須岐」とあったのは、「ウスクとも。」〔『上代編』〕とあったように、動詞ウスクの連用形と見られ、ウススクーイソクは母音交替ととらえられる。

なお、上代では、清音キかと見られるイソキ「急」〔水鳥みづとりの発たちの急いそきに〈多知能已蘇岐尔〉〕〔『万葉集』巻二〇・四三三七・防人歌〕の例により、清音クのイソクであった

と見るのがよいか。動詞ㄱが時代を下ると濁音化してㄱになる例の、サワク「…騒さわく御のみ民たみも〈散和久御民毛〉」：『万葉集』巻一・五〇）―サワグ「躁ガシサワグ（平へい上じやう）」：『類聚名義抄』図書寮本一一四、「平」は低いアクセント、「上」は高いアクセント、「上」「平」の右傍線は声点が双点で濁音であることを表す）などについては、別書(二)『国語派生語の語構成論的研究』[2010.3 塙書房]「第五篇第一章」に詳しく述べた。イスクは、イソク「急」の反復・継続を表して、急ぐの反復は、急ぐことの繰り返しであり、それは慌てる意に相当近いと見られる。

そして、接尾辞フを伴ったイスロコフは、慌てる・うろたえることの継続を表すと考えられよう。すなわち、イスロコフは、慌て続ける、うろたえ続ける意を表すと考えるものである。

なお、アワツ「慌」(↓アワテル)は、

文策即甚忙アワテオヒ江 怕オヒ

〔文策即ち甚だ忙オヒテ怕オヒエ〕

(石山寺藏『金剛波若経集験記』平安初期点、

エの左傍線はヤ行エであることを示す)

など、平安初期以降の例が確認できるが、上代の確例は見当たらない。後には、イスク・ウススク・ウソソクよりアワツ「慌」の方がよく用いられるようになったと見られる。

最後に、

† Isurogoi イスロコヒ n. Contention ; quarrel. Syn. Arasoī.

(『和英語林集成』[第三版] / 「Contention ; quarrel」は「争いや喧嘩」

(『日本国語大辞典』[小学館]「初版・第二版」)の意)

の例をどう見るかであるが、『和英語林集成』[第三版]が刊行された一八八六年は、『祝詞』の例より大きく時代が下っており、方言の例を含めてその間をつなぐ例が見当たらないことから見て、『祝詞』大殿祭の例の意味が不明になった後に、恐らくは、アレビの部分から意味が推測されたか、あるいは、イサカフ「くぜち、まもり、いさかひて」(『平中物語』)やイサカヒ「人のいさかひする音のしければ」(『大和物語』)と合わせ考えられたかして、「争いや喧嘩」の意が、『和英語林集成』[第三版]に取り込まれたものではないかと思われる。これが本来の意味であると見なければならぬものではないであろう。